

本日の演奏会は、モーツァルトの夕べである。早くから神童として芸術性の高い作品を数多く残している彼に対して次の様な表現が許されれば、この3曲は彼の芸術の完成期から円熟期の作品とすることができるだろう。その意味でジャンルは異なるが同じ器楽曲として3曲を比べてみるとモーツァルトの芸術的創作過程の足跡が明らかになるだろう。1779年8月3日作曲完成の日付を持つセレナーデは、年初めまでのパリ、マンハイム旅行を色濃く反映している。木管群の音調はマンハイムのオーケストラから得たものであろうし、リピートがなく進行性の高い第1楽章と終楽章、また短調楽章の構成にみることのできる形式感^{ベア}はパリのものである。一方2つのシンフォニーの管楽器の編成では、第39番に於てオーボエを、第40番に於てクラリネットを欠いている。(後に彼自身の改作でクラリネットが加えられている。本日の演奏では、クラリネットのあるものが用いられる。)また第40番ではティンパニとトランペットがなく、また普通対^{ベア}で用いる二本のホルンも調管の異なるものを使用していて趣を異にしている。形式的な側面では、第39番が古典主義の首席の地位をモーツァルトに与えたにふさわしい理性の模範を示す一方で、第40番がその第1楽章展開部に於て見せている転調の大胆さ——A. アインシュタインは、「この展開部は魂の深淵への墜落」と評している。——は調性的脱線を示している。がしかし、今日の私達の耳にはこの調性感は脱線ではなく円熟として響いて来るのである。

セレナーデニ長調は、7楽章構成を取っており、中心部分となるコンチェルタンテは第3楽章と第4楽章でト長調をとり躍動感を演出している。また第5楽章が前述のようにニ短調になっており、フルートを除く3種の木管楽器を独奏的に用いている。これは前2楽章のコンチェルタンテに於て木管楽器が本来

の独奏的な編成をとられていないためでもある。またメヌエットは第2楽章と第6楽章に配置されていて、中でも第6楽章のメヌエットにはこのセレナーデの通称にもなったポスト・ホルンが用いられている。(原譜にはピッコロ・フルートの記載もあるが、実際にはこのパートには何も書かれていない。)ポスト・ホルンは、ホルネット属の元祖でありトランペットの兄弟分であるが、フレンチ・ホルンの仲間ではない。元来ホルンは管のふくらむ部分に音色を決める要素を持っているが、ホルネット属の場合は直管であり音色の深みはない。その代わりに遠音の効く楽器で、もともと郵便馬車の合図に用いられたことでこの名称を得ている。

次の2曲のシンフォニーは、1788年の夏、短期間のうちに続けざまに作曲されたモーツァルト最後のシンフォニー3曲のうちの2曲である。第39番は特に第3楽章のメヌエットが印象深いであろう。ディヴェルティメントニ長調(K.334)のメヌエットと並び賞されるモーツァルトのメヌエットの逸品である。トリオのクラリネットを聞くと、モーツァルトがいなければ、クラリネットはオーケストラの一員になれずに終わったのではないかと思われる程である。第40番は、モーツァルトのシンフォニー中唯2曲の短調によっている。それだけに悲劇的と評されることが多いが、第1楽章や第2楽章の帰結は、精神の解放への完結を示していて古典主義的解決を与えられている。またメヌエット楽章には民謡風の主題が登場し、悲劇的なものは感じられない。全体を通じて、第40番シンフォニーは、その速度が生命であろうと思う。音色やフレーズにこだわって速度を殺してしまう演奏が一般によく聞くところである。どうも心の中で奏される第1楽章がいつも最上のものである。

(藤井部 勉)